

2016年熊本地震への対応と災害支援

そのときイノアックはどうか

2016年4月14日21時26分とそれ以降数回にわたり、熊本県を中心に強い地震が発生しました。イノアックは熊本県菊池市に製造拠点（菊池工場）があり、お取引様や地域に住む従業員が多数あります。幸い従業員は全員無事で、工場建屋や設備への致命的な被害はありませんでした。この特集では今回の地震の後、イノアックが行った災害支援活動と復旧作業についてご報告します。



益城町：菊池工場から車で30分

熊本市内：菊池工場から車で1時間

■ 菊池工場での地震発生直後からの時系列

4月14日21時26分

熊本地方最大震度7の地震発生、菊池市は震度5強

4月15日

現場点検の結果（異常なし）と安否状況を本社へ報告

4月16日1時25分

熊本地方最大震度7の地震発生、菊池市は震度6強

4月16日未明

夜勤者および近隣住民が工場グラウンドに避難

4月16日5時

ライフライン（水道、電気）を確認、問題なし
（水道は井水、電気は特高により供給）

4月16日7時

防災対策本部を事務所棟2階に設置

4月16日

従業員約20名が集合し、従業員の安否確認を開始

4月16日9時

防災対策本部を事務所棟2階から旧事務所に移動
（余震が強く、2階は危険と判断したため）

4月16日11時

余震が強いため、工場建屋内への出入りを禁止

4月16日昼

昼食は非常食のカレーライス（1回目）

4月16日15時

余震が強く復旧作業に手をつけられないため、2名当直として他は解散

4月16日

菊の池体育館、大津中学校、大津町障がい者福祉施設、大津町美咲野小学校、菊陽町役場、合志市役所、上益城農業協同組合益城支所、長洲町役場などに、支援物資の提供を開始。また顧客や菊池工場従業員にも同様に支援物資を提供する



夜勤の従業員及び近隣住民が工場グラウンドに避難

4月17日早朝

従業員22名が集合し建屋状況を確認、工場内設備点検を開始

4月17日10時

全従業員の安否を確認

4月17日11時

建屋および生産設備の状況を把握

4月17日12時

社有車ガソリン補給完了

4月17日昼

昼食は非常食のカレーライス（2回目）

4月17日19時

建屋の安全と設備復旧のめどがたち解散

4月18日8時30分

緊急全体朝礼、本社より支援部隊到着

4月18日

本格的に復旧に向けた活動を開始

◇ 建屋鉄筋プレス補強：余震に備えて建屋補強

◇ 生産設備の位置ずれを修正、復旧

◇ 仕入れ先状況の把握：

一部に孤立、生産設備の損壊あり

◇ 従業員の被災状況確認

◇ トラックのレンタル

◇ その他



工場被害：作業台ズレ



工場被害：天井崩壊

■ 菊池市へ支援金進呈



菊池市江頭市長(向かって左)へ翁代表取締役から支援金の目録贈呈

支援金総額 **3,000,000円**

■ 国内外拠点から集まった善意

人事総務部長 大矢 英男

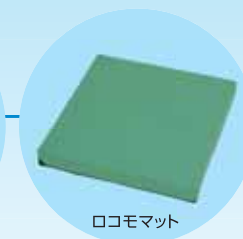
2016年4月19日、(株)イノアックコーポレーションとイノアック労働組合は、熊本地震で被災された方々(社内被災者を含む)向けの義援金募集を、全世界のイノアックグループ社員に呼び掛けました。義援金募集の輪は、国内主要事業所・系列会社・関連会社35拠点をはじめ、北米・韓国・フィリピン・インドネシア・マレーシア・タイ・ベトナム・中国(6社)のイノアック社員・現地社員・パートナーの皆さんへ広がり、多大なる善意が集まりました。

募金総額 **5,293,821円**

■ 主な支援物資



ベリー暖ケット



ロコモマット

品名	数量
マットレス	2,400枚
P・E-ライト/P・E-ライトZマット	1,844枚
P・E-ライトZシート	241枚
飲料水(ペットボトル)	4,479本
カップめん	504個
さんま缶詰	50個
ティッシュ	90個
ウエットティッシュ	30枚
マスク	10,000枚
タオル	5,000枚
軍手	5,000枚
ベリー暖ケット(防寒具)	600枚
ロコモマット(高齢者向け運動具)	20枚
その他	



グループ会社の(株)九州カラーフォームでマットレスの突貫生産、支援物資として提供



菊池工場製造の2Lペットボトル容器を自衛隊の給水所に提供



従業員一丸となり素早い復旧へ

(株)九州イノアック 菊池工場長 友清 考治

4月14日の菊池市震度5強の地震では幸い工場内外での損傷もなく、夜勤も通常稼働しました。16日未明の震度6強の地震は想像以上の揺れで、初めにドスンと上下に揺れた後に、横揺れが30秒以上続いたように感じました。その後も震度5強クラスの揺れが断続的に続き、会社に向かう道中も激しく車が揺れた事を思い出します。工場内の点検を始めましたが、余震が余りに頻繁に発生するため16日中は工場への立ち入りを禁止としました。

生産設備被害は、ブロー成形機の位置ズレの他に押し出し機の芯ずれ等がありましたが、すぐに復旧させて生産に支障は出ませんでした。建屋は床面の割れや壁のヒビ、天井の部分落下等が生じており、地震による建屋損傷部位は86か所になりました。

従業員の安否確認は、避難所に数名の方が一時避難されており確認が遅れましたが、全員無事で安堵しました。従業員の中には、自宅半壊や一部損壊の建屋被害が生じています。今現在(6月時点)も罹災証明取得や損傷部の業者修復を行っている所です。

今回の地震では被災工場としての復旧作業と災害支援拠点の役割があり、復旧支援は本社からの支援部隊、災害支援は本社営業部隊が活動を行いました。

復旧作業では安全かつ完全復旧をめざし、誰も怪我する事なく生産可能な状態に戻すことができました。

熊本は阿蘇を含めて着実に復興しています。皆さん、機会があれば是非とも九州地区に足を延ばしお立ち寄りいただければ、これ以上の復興はないと思います。よろしくお願い致します。

復旧支援隊の活動報告

安全衛生防災管理室 内藤 邦尋

4月17日に安城から熊本入りしました。2回目の震度7が熊本を襲った翌日です。空路より確実な新幹線で博多に入り、そこから車で南下し、夜の10時頃に熊本植木の旅館に到着。宿は自衛隊・赤十字隊や報道陣でいっぱい、緊張した雰囲気の中で8人相部屋に通されました。この宿は2日しか予約が取れず、この後は甘木、筑後、八女と宿を求めて転々とする事になりました。

支援隊は、私のほかにグローバル生産管理部2名、プロセス部1名、人事総務部1名、物流部1名、自動車部品事業部調達部1名の総勢7名です。

翌日菊池工場へ向かい、まず全員朝礼で支援隊到着の報告。この朝礼の間も震度4が発生。この日は震度3~4が6、7回は発生しました。友清工場長の状況報告を受けて、さっそく工場の被災状況、従業員やその家族の安否、仕入れ先状況、製品在庫などを確認、被災した従業員のお見舞いなど分担を決めて活動を開始しました。

幸いにも菊池工場および菊池市の被災は軽微でした。ただ、ご家族の安否が不明な従業員の方々がいたこと、南阿蘇の仕入れ先が一時孤立したことが、当日の最大の懸念事項でした。

熊本は落ち着きを取り戻しつつあるようですが、まだ生活に不自由されている人たちが沢山いることを忘れてはいけません。また、いつ来るかわからない自然災害への備えを怠ってはいけません。地震・カミナリ・火事・オヤジです。



今年の新入社員：みんな元気を取り戻しています

グローバル人材育成の取り組み

イノアックにおける人材育成

イノアックでは、次世代の人材育成や広く世界に貢献できる人材育成にも力を注いでいます。この取り組みのひとつとして、日本の大学で学ぶ外国人留学生と海外へ留学する日本人学生を支援する目的で、1987年にイノアック国際教育振興財団を設立しました。また2014年、日本で初めてポリウレタン主体の高分子分野を対象とした研究と研究者を助成する、ポリウレタン国際技術振興財団も設立しました。



■ 公益財団法人イノアック国際教育振興財団

1950年代から事業のグローバル展開を推進してきたイノアックは、世界に通用する人材育成の必要性を痛感してきました。このため、グローバルに活躍する人材の育成を目的とした「イノアック国際教育振興財団」を設立しました。1987年の設立以来、アジア諸国をはじめ様々な国の優秀な学生の日本への留学や、日本の優秀な学生の海外留学に奨学金を給付し、支援を受けた学生の人数は280人を超えました。多感な若者が自分の生まれ育った国を離れ、言葉や文化の違う異国で多くの困難を乗り越えつつ生活する体験は、その若者本人のその後の人生に、いかほどの影響を与えるか計り知れないものがあります。また、自分とまったく異なる考えをする人々がいて、それらの人々と意思疎通し、理解しあえる能力を持つ若者を育てることは、ひいては将来の世界平和や国際理解への貢献につながると信じています。



公益財団法人イノアック国際教育振興財団

交流活動

イノアック国際教育振興財団では年間を通じて、さまざまな交流活動を行っています。そして財団と奨学生、また奨学生同志の絆を深め、未来につながるネットワークを構築しています。

工場見学

日本の製造業の一例として、イノアック安城事業所の工場見学を実施しています。自動車部品、発泡品の製造ラインの見学を行い、ショールーム見学では、多くの奨学生たちが、私たちの生活の中には想像以上にイノアック製品が活用されていることに驚いていました。多様な素材で、あらゆる分野・業界で人々の暮らしに役立っているイノアックの事業内容について、奨学生のみなさんに大変興味を持っていただいております。



研究発表会

日頃の学業の成果について、奨学生のみなさんが大学・大学院で学んでいる研究内容を発表し、活発な意見交換を行います。研究発表はそれぞれ違う分野の内容で、奨学生のみなさんは非常に興味深く発表に耳を傾けています。「仲間の研究発表を聞くことで、自分自身の学びになった」「様々な視点からの質問を受けることで、今後の研究を改善することにも役立ち、全面的に問題を掘り起こすことができた」という奨学生からの声が多く寄せられています。



懇親会

毎年、日本ならではの伝統文化を体験できる日帰り旅行を実施し、当財団の役員と奨学生との親睦と理解を深めています。懇親会には奨学生OB・OGも参加し、役職、年齢、国籍、性別を越えて、楽しい雰囲気の中で、交流活動を行っています。2015年には愛知県豊川にてちくわ作り体験、新城の湯谷温泉にて温泉入浴、昼食懇親会を行いました。また奨学生の意見を積極的に取り入れ、奨学生が主体となり企画・立案する各国の料理会を実施しています。奨学生たちは忙しい時間の合間を縫って集まり、打ち合せを重ねます。そして奨学生ならではの楽しいアイデアが凝縮された、各国の料理会が開催されています。



■ ポリウレタン国際技術振興財団

アジアにおいて初めてポリウレタンフォームの生産が開始されてから60周年の節目である2014年に、一般財団法人ポリウレタン国際技術振興財団が設立されました。ポリウレタンフォームはその用途が生活用品から物流、自動車部品、情報機器へと多方面にわたり多様な展開を遂げてきており、人々の暮らしをより豊かで便利かつ安全なものにしてきました。

ポリウレタン業界は、多様な開発によって産業の発展に大きく貢献していくことが期待されていると同時に、安全・環境・グリーン・エコロジー・省エネなどの環境問題に直面しており、地球環境保全といった社会的な環境、課題に業界全体で応えていく必要があります。高分子化学およびこれに関連する分野の研究に携わる研究者の研究活動を支援し、学術の発展に寄与することを目的として、将来のポリウレタン産業の発展のため、ポリウレタン研究の更なる発展と人材の育成をめざし、支援活動に努めています。

ポリウレタン国際技術振興財団はその主な事業として、ポリウレタン技術の発展および環境にやさしい研究開発等に貢献している大学、研究所、個人等の研究機関に対し支援するとともに、ポリウレタン国際フォーラム等のポリウレタン研究発表に関する会合を主催、共催または協賛することで、国内外を問わず高分子分野の研究者の活動を支援し、研究に寄与しています。

2015年には「アジア発 ポリウレタンの未来を探る!」と題しポリウレタン国際フォーラム2015を開催し、「安全」「環境」「グリーン」をメインテーマに掲げ、国内外から多くの参加者を得ました。当日は参加者による活発な意見交換、情報交換がなされ、ポリウレタン業界の今後の成長に向けた議論の場となりました。



ポリウレタン国際フォーラム2015



ポリウレタン国際フォーラム2015